

〔史料紹介〕

「芦屋村専右衛門旅日記」

天明元年閏五月七日～九月七日

成 田 耕 治

この旅日記は、当時木造町有楽町にあった翻刻者の実家で六十年ほど

前、仏壇を新調した際、それまで使用していた古い仏壇の引出から他の書付などと一緒に出てきたものである。この古い仏壇は代々川除村字栄盛（旧芦屋村）に居住していた先祖が使用していたものを、翻刻者の父が昭和四年頃に木造町に移転した際に持ってきたものである。先祖は代々旧芦屋村日蓮宗道円寺の檀家で、墓石も同寺所属の、集落から少し離れた墓地にあったが、昭和三十一年（一九五六）に改葬し現在は木造町実相寺にある。

この日記の大きさは、縦一七センチ×横七センチの和紙三十二丁を綴じたもので、このうち、表紙を含め二十六丁が使用されている。表紙は縦に表題が書かれているが、おおよそ下部半分が欠損しており、「天明元辛丑」、「道中名所」、「閏五月七日」、「奥州」の文字は判読できるが、筆者の名前は欠損部分に書かれていたと思われ不明である。

筆者は、以前に翻刻者の長兄が調べた家系譜及び墓石に刻まれた戒名、没年月日を基に推測した結果、翻刻者から数えて八代前、享和二年（一八〇二）没の専右衛門、当時三十六歳と推定され、その父親、寅之助は前年に没していることになる。よって、この日記の資料名は「芦屋村専

右衛門旅日記」とした。

日記の記載内容は「やと覚え」と書かれているように、天明元年（一七八一）閏五月七日から九月七日まで、旅程日毎に宿泊日、宿泊地名、宿主名、宿泊料、購入米代金、船渡し料金、関所料金など主に金銭出納が記録され、時に道路、気象状況が書かれているが、筆者本人の感想、感慨などは一切述べられていない。

報謝を受けて宿泊した際、△、○を付しているのが、僅かに本人の感想を表している箇所といえよう。

旅程の概要としては、往路は鯉ヶ沢を一泊目に、西浜街道・羽州街道を通り秋田に出て、秋田からは羽州浜街道・北国街道で象潟、酒田、鶴岡、村上、新発田、新潟、柏崎を経て高田に至り、高田からは長野、松本、諏訪、甲府、身延と中央高地を横断して興津に出て、興津からは東海道で静岡、浜松、岡崎を経て名古屋に至り、名古屋からは中山道、美濃路で萩原、墨俣、大垣を経て草津に至り、琵琶湖を船で大津に渡り、京都に着いたあと、さらに大坂、堺まで足を伸ばし帰途についている。復路は往路と同じく美濃路、東海道を経て興津に至り、興津からは富士宮に寄り道して吉原に出て、三嶋から伊豆にまわり伊東、熱海、真鶴

などを経て東海道小田原にもどり、藤沢から鎌倉に寄り道して戸塚に出、池上を経て江戸に來ている。江戸で三泊した後、奥州街道で仙台に至り、仙台からは塩竈、松嶋、石巻にまわり、石巻からは北上川沿いに登米を経て佐沼に廻り道した後一関に出て、一関から奥州街道で盛岡に至り、盛岡からは津軽街道で鹿角、毛馬内、小坂を経て、碓ヶ関を通り帰宅している。往復一一八日、約三千キロに及ぶ旅である。

旅の目的は、まず前年亡くなった父親、寅之助の身延山での分骨供養をすることで、そのついでに京都、大坂まで足を伸ばし、かねて話に聞いていた神社・仏閣を訪ねたものと思われる。

また、帰路では、各地の日蓮関連旧蹟を尋ね、おおむね日蓮宗の信者と思われる個人宅や日蓮宗の寺に宿泊しながら帰国している。ちなみに全行程のうち、三十八泊は報謝を受けて宿泊しており、それも嶋田善妙寺以外は全て江戸からの帰路であるのは興味深いことである。

それにしても、大坂・鴻池を訪ね、仙台からは奥州街道の順路を外れて石巻、佐沼付近へ廻り道をしているのはどのような理由なのか、特に日蓮関連の伝承も旧蹟などもないと思われる場所なので不可解なことである。

翻刻者の実家には、この日記及び筆者について語り継がれているものは何もなく、また、先祖の出身来歴なども不明であるが、二二〇年余も前に日蓮宗という同宗門の誼だけで、このように遠隔の地で報謝を受けて旅ができたというのは驚きである。

凡例

翻刻に際しては次のようにした。

一、地名については現在の地名を（ ）で傍註した。比定出来ぬ場所、地名は原文のままにした。

二、原文における文字は大小に拘らず一律とした。

三、虫食い、判読不能の文字は推定される文字数を□で示した。

四、誤字は正しい字を傍註し、疑問のある場合は（○○、カ）とした。繰返し出てくる場合は（○○、以下同）とした。傍註で不足の場合には文末に註記した。錯誤による日付などの間違いなどは（マ）と傍註した。

五、合字の「㐂」は「より」と表記した。

六、一行当りの文字数、文節数などは原文に拘らず、適宜な長さにした。また、原文には句読点が全くないが、適宜、読点を加筆した。

付記

翻刻に際しては、弘前大学大学院地域社会研究科博士課程・市毛幹幸氏並びに同・土谷紘子氏に懇切なご指導を頂いた。明記して深く謝意を表します。

(表紙)

「天明元^{辛丑}

道中名所

(表紙下部約半分欠損)

閏五月七日

奥州

(本文)

やと覚

一、鰯ヶ沢

^(前所、以下同)
ほうさ泊り、

壬五月八日

一、大辻せ

キツん十八文泊り、

同九日ふかうら

一、染や、嘉次郎様より、十匁ふん被下、

此日

一、黒前

甚右衛門殿

式晩ニ酒代五文、此ところ米三十五文、

十日

一、同村ニ、式人共老奴あん□□

とうり□

壬五月十一日

一、秋田御はん生^(御書所、以下同)、三十文はん銭、

此日

一、初森

キツん十二文泊り、

十二日

一、野白出し船わたし 十文し

此日

一、金光地村

○ほうさ泊り、

此村ふと市村^(二日市)、船わたし五文、

十三日

一、あふ川

△キツんほうさ泊り、

十四日

此村やさ袋ニ而のこり酒のむ、

一、くぼた

○ほうさ泊り、

御ばんそ半銭三十五文懸け、わたし銭廿、

わたりこ江て新や^(新道)、此ところニ而中ちけ^(中境)、ほうさ、

十五日

一、石野わき^(石脇)、泊り、

キツん三十五文、

十六日ハ

喜兵衛殿

なぬし仁五郎□^(破損)

九左衛門殿

てふまや 幸左衛門様

ほん蔵船之り七文、

水森、此ところ上村成、此おき二飛嶋有、從之志よこし有、

十六日

一、こさ川(小砂)

次郎左衛門殿

キツん四十文、

此村ニ耆り半ノ大志坂有、此ふもとニみかた村と申有、又、落うら(滝の邊)

と申村有、それより福うらノ船わたし、十文、此村ニ御ばん生、又此

村ニ小添川(たぎ)わし錢十二文、

十七日

一、坂田千間町(森田)

かゝや太郎左衛門殿

キツん三十五文、

此町ニ而御手はん三十文取、

此ところより一りわたし有、船錢四十文成、より之、ちきみや申有、

又、うらこれと申も有、これより、こやの濱有、それより、よな坂有、

それより下川(う)ノ大山村ノく□

十八日

一、さんぜ村(三瀬)

半兵衛殿

米五十文、キツん三十文、

壬五月十九日

一、中村(中)

太田庄右衛門殿

米六十五文、キツん二十八文、

此村ぶどう江有、此をき二青島と申有、又此村わたし有、船錢式十

五文、

廿日

一、村上小町

長濱や太次右衛門殿

米五十五文、キツん五十五文、

此家ニ而江中と申ノ中林久次郎様より葉耆ふく被下、

此町ニ而金売、耆歩、耆貫五百八十五文、此村ニ平林川、船錢十文、

それよりくろ川せこ江(黒川瀬)

廿一日

一、中蔵

中畑清左衛門殿

米五十文、キツん三十五文、

此村ニかちと申町有、

一、從之柴田御上(前柴田(神城下、以下四)加

此町ニ而わらんす式足ほうさ、

米五十三文、

廿二日

一、新とて、船ニ而泊り、(上手)

此村船ニのり船錢五十文、

一、仁方江付、ひろごろ(新野)

廿三日

一、同町古町

高橋や茂四郎殿

米五十六文、キツん三十三文、(十段)

それより角田山懸、そ(祖國、日蓮 以下四)しの御明はんうけ、(妙明)

廿四日

一、屋彦^(新彦)

米六十五文、キツン三十文、

一、寺泊り、上村

そし様やどり寺式かち有、

一、市茂前^(出雲)ハ上村

廿五日

一、志ふや村^(鎌谷)

米六十五文、キツン三十文、

此ところ江戸寺に祀^(南カ)、それより柏前上村、此村ニ加めわり坂有、

此ふ元ニおぼ水有、又、べんけ力もち有、此下ニ小村有、又、初前と^(金力)

申村、山大なでちき、此間山坂大なんぞ、

廿六日

一、柿前^(三)

米六十五文、キツン^(三十、カ)□文、

此山をくニうら川村、大水ニなかれ、人馬共皆なかれ、従之ふた川橋

はちれ、船錢五文かけ、これより今町上村、又、高田御上加、ひさもん^(尾沙門)

様有、そし様ノ御むかいニ御出しニ被成候、これより新や着^(新井)、

廿七日

一、新や^(新井)

米六十文、キツン式十四文、

せき川御ばん生有、従之ふたしく上村有、

廿八日

一、むるえ村^(幸礼)

しちき太次兵衛殿

米六十四文、キチン^(マツ)二十五文、
廿九日四ツ時付

一、善光寺

米六十四文、キツン式十四文、

堂、表口八尺間八間、裏八尺拾八間有、外らかん返し、

六月朔日

たんば泊ならち、^(丹波)小市川ならち、大雨ふり、此間ニ小川わたり、

船錢十五文、小川山坂をうく、かけ大なんぎ、

朔日

一、みのち村^(水内)

米八十文、キツン三十文、

此村ニまかり橋有、^(橋)

六月

さる橋とも申成、さるがとうけ有、山みち行、えな町江出し、それよ

り青柳上村、

二日

一、法久村

米六十八文、キツン二十四文、

此村とうげ有、みたれはし村有、又とうげ有、^(凡橋)

松本上加

それより野村新田、此さきニをえわけ有、右ハ京みち、左ハしわみち、^(通分)

此村原有、

三日

林や涼兵衛殿

大黒や勘兵衛殿

八ギ重左衛門殿

油や甚助殿

紙や五郎左衛門殿

金左衛門殿

米や久兵衛

一、しをちり^(塩尻)

吉野や義兵衛殿

キツン二十四文、

此村しわとうげ、此上ニ而^(富士山)藤山見江、それよりしわの明神、^(諏訪)
上しわ

それより高嶋上加、

四日

一、金沢村

柳や伝右衛門殿

キツン二十四文、

こうしゆ入、御せきそ有、それより下面田木村、此村ニそし様御むか
いに出し、びき門様有、村より上ニそし様ノ御せ□ほをとぎ被成し石
有、

五日

一、仁ら沢村^(基崎)

ちたや宇左衛門殿

キツン二十四文、

一、光しゆ上加ニ出、それより卯かい山参、

六日

一、市川村

五右衛門殿

はたご、百十二文泊り、

一、青柳村出し

それより小むろ^(小葉)、ほろん石寺とか参、

六月七日

同

一、青柳村

仁左衛門殿

キツン二十四文、

それより

八日

一、身延参

ふたばん^(二晩)ニ、式百五十文、はたご、

九日

大黒様百文し、三光とう大^(塔)三六文し、
をくのえん^(興の院)三百文、御かへ^(備前、以下同)長十五文し、

此寺ニ而、寅之助はこち納佛事、
それより七面山参、御かへ長五百文、

十日ハ、式十文し、

一、そし様御かへ長、おこちとうかへ長、あさ日中様かへ長、
此晩ハ、^(御前堂)

一、くわんとう寺^(久遠寺)ニ付、

ふた晩、△△キツんほうさ、

十一日ハ、晩ハ清かん寺ニ佛事、

六月十二日ハ、身延より出し、おう野参、おまん様ノ寺有、此寺ニ参、
従之坂川原まはり、西行とうげ有、
そのふ元、
十二日

一、万沢村

キツん十八文、惣やと

此村御せきぞ有、

かく蓮寺

茂七殿

(これより) 一、参山中ニおいわけちやや、これもこうしゆさかい、
(駿河) 之よりしるか、ここニ而とうざニわかれ、

一、ぬるゆ 三右衛門殿

一、高矢ノ 七左衛門殿義弟

一、大光村 元田 与右衛門殿御弟

一、富松 右衛門殿

一、高ほ 藤次郎殿

六月十三日

(風雨驟降) 此日大雨封卯なんきよニ、此ところニやとり、此晚大風大雨、

十三日

一、小こち村

十四日、此日せ天、

一、明く様ニ とうりよ、

ふた晚ニ、百二十五文、はたこ、

従之

一、おきツ川七文し、ニこし、それよりおきツ出、それよりみよの松

(清見) 原、清涼寺、右ノウえニ有、そてちかうらと申入うみ有、此村松原

一、有、

十五日

一、ふ中村

米七十文、キツン二十八文、

上加成、竹さえく有、あへ川六十四文わたり、かな口わ藤ノ町、

上加成、

六月十六日

一、嶋田

△キツンほうさ、米六十四文、

此ほうさまハ寺ノウしろ成、

おえ川一りよ上り、ざえご百三十毫文し、こし、○不参

それよりかなや江出、それよりさよノ中山とうり、あめノもち、にし

坂ノわらんびもち、それよりぬきなと申村有、そし様ノちちおやノ

御出し寺成、

十七日

一、ふくろえ

キツン二十六文、

めちけと申有、又、江ノ衆濱町有、此村天龍川十八文船銭かけ、

此村入うみ一り半成、新や御はんぞ有、二十文と申せん成りと

も、かれち、

十八日

一、新や

米七十六文、キツン二十八文、

これより三川、此村吉田上加有、大橋有、百三十けんほと有、

十九日

一、赤坂

キツン三十文、

一、岡前上加成、大橋七尺間、百七十二間成、此橋天下ふしん成、

此ところ米六十四文、

善妙寺二

金四郎殿

大田や金左衛門殿

糸や又四郎殿

廿日

一、成身^(備後)

三川や惣右衛門殿

キツン三十五文

^(これより)尾張^(尾張國)

より之おわりくに、此村ニあち田明神、又、なをやノ上加有、此とこ

ろ米六十成、^(文)尾張

廿一日

一、はき原^(新)

鶴や色左衛門殿

キツン二十八文、

これよりおこしと申成、これより三能尾くに成、しの又村ニ而金売、

壺^(文)坂、壺貫五百七十文成り、はきわらより六文わたり二ツ有、二文わ

たり壺ツ有、三ツ有、^(文)

一、大がき^(大坂) 上加あり、又、樽井と申町有、米五十五文、

廿二日

一、せき加原村^(備前)

かどや与兵衛殿

キツン二十四文、

これより一り上り、大三ノくに成、^(近江國) 此村ニちりはりとうげ、上ニちや^(尾張)

屋有、それより見れば大三ノ水うみ目下ニみえ、^(尾張)

廿三日

一、市川村^(愛知)

甚兵衛殿

米六十六文、キツン廿五文、

むさ^(武佐)と申有、又、か^(美濃)みと申有、又、もり山と申有、くさ^(草津)ちと申有、

山せわたし船錢二十四文かけ、從之せたノから橋見え、みちうみ、^(尾張)

をうち江わたり、^(大津)

廿四日

一、おうち村^(大津)

おわりや新蔵殿

米七十五文、キツン二十五文、

廿五日 あさ付、

一、京、大^(方広寺大仏殿) 仏、三十三間とう、^(堂) 東大谷、^(東本願寺)

一、五町通り、二町内、

六月廿五日、あさより、

一、かきや

重兵衛殿

米七十五文、キツン五十文、

廿六日、とうりよ、

西大谷、清水、やさか、とふかふたい寺、^(西本願寺) ぎおん宮、^(知恩) ちおん院、

せいくわんじ、^(不) いす三式ふ、^(和泉式部、カ) 六角とう、^(北野天満宮) びくに寺、^(北野天満宮) 北ノ二天神、

嶋原妙法寺、来万寺、本国寺、あら方參、

廿七日、京より出、

此村ニゆど上加、^(岩井水八幡宮) 八幡宮有、船みち有、

廿七日、晚付、

一、大坂長町ノ八丁目、

一、たえしや

徳兵衛殿

米六十六文、キツン二十六文、

廿八日ハ、大坂より三りさき、坂え町、^(住吉大社) しみよし明神、^(妙因) 明こく寺、^(四天王寺) 天野寺、

小ノいけ、^(池)

廿九日

一、京かいり

かきや重兵衛殿

キツん五十文、

一、京とりべ山日しん様寺ニ参、それより下り、ぜ^(一)御しろみて、御は
んそ、せたの唐橋わたり、

卅日

一、か^(一)み村

高や十兵衛殿

米七十文、キツん三十文、

わくお二而藤才く有、竹才くも有、ちやししきかへ、はしもかい、

七月朔日 晩ん

一、柏原^(一)

弥兵衛殿

米六十八文、キツん二十八文、

二日

一、はきわ^(一)村

ツルや色左衛門殿

米六十文、キツん二十八文、

三日

一、ち龍^(一)

光やへ七殿

米七十文、キツん二十六文、

金売、壹^(分)、壹貫五百七十六文、

七月四日

一、野田船町

やをや専之助殿

米六十六文、キツん三十二文、

此村、あらえ^(一) わたり廿四文、

同五日

一、ゑん衆はま町はた^(一)ノ町

小嶋や清次郎殿

米六十七文、キツん廿四文、

此村、天龍川八文ごえ、此村、大雨二而なんぎ、

七月六日

一、ふくろえ^(一)

金四郎殿

米六十四文、キツん二十六文、

此村、ひるより大雨なんき、

七日、此村六り参、と泊、

一、かなや^(一)

惣七殿

キツん廿文、

おえ川とまり、川上三四り上り、か^(一)もと申村二百性二とまり、

八日

一、かも村ノ^(一)

作兵衛殿

はたこ五十文し、

おえ川^(一)おこし

こえ、船銭百三十五文し、

九日

一、嶋田

善妙寺

△△キツん ほうさ

十日、とうりよ、

うら町九兵衛様ニ而中ちけ被下、

一、あへ川、七十文ごえ、又、大雨ふり、

(十一日、日付脱)

一、ふ中^(一)

盆せきや清蔵殿

キツン二十六文、

此村三り、大雨大なんキ

(十二日 日付脱)

一、江ちり^(江尻)

米六十八文、キツン三十二文、

從之八丁^(マッ)ばかれゆけばすみちと申町有、御以分^(御以分)け
御手成、^(マッ)

七月十三日

一、おきち^(興津)

キツン三十文、

おきツ川^(興津)ならち、^(なづ、カ)

一、藤川^(高土川)ならち、とまり、

十四日

一、ごんこち^(不明)

○ほうさ、大きニ御ちそ成、^(船老)

十五日

一、打ふさ^(内房)

△キツンほうさ、

ふち川^(富士川)ちなはしわたり、^(瀬橋)

一、のまくほ江出、此日徳兵衛殿ニわかれ、^(沼久保)

十六日

一、ふし山村^(富士山)

十七日、大雨ふり、ふた晩^(逗留)とうりよ、

□□や弥右衛門殿

此町一り有、船付

利助殿

加し沢九兵衛様

寺^(龍)ふ元八左衛門殿

ふか沢義左衛門様

○〇ほうさやと、

竹ノちえもらえ、此村そし様ノ御久せき有、おニおなはとき泊上□し^(旧蹟)

寺有、あん国^(安国)ろん御ちくり被成寺有、^(國)

十八日

一、よし原^(吉原)

米六十六文、キツン二十八文、

十九日

一、のまち^(沼津)

キツン十六文、

三嶋より入、にら山^(蓮山)、江川太郎左衛門様、それよりえちのくにニ、そ^(伊豆國)

し様ノ御村ふ元ニ有、

廿日

一、うき橋村^(浮橋)

△キツンほうさ、

廿一日

一、卯さみ^(宇佐美)

△キツンほうさ、

船来八左衛門様

七月廿二日

えとふ江参、又もとり、あちろ出し、^(瀬代)

廿二日

一、あたみ、此村湯有、^(熱海)

△キツンほうさ、

おきや市朗右衛門殿

此村、お寺様よりそし様御かたみ被下、白米五合被下、それより

ふくふら二出し、
(福前)

廿三日

一、まなちる村
(真路)

△キツンほうさ、

廿四日

一、大表
(小田原)

キツン十六文、

イツリ、船わたり有、
(一里)

廿五日、大雨大風

一、大えそ
(大瀬)

キツン十六文、

廿六日、とうりよ、

廿七日ハ、藤沢より入、
(千瀬) かたせ、竜口参、
(マ)

十七日

一、こしごえ村
(腰越)

△キツンほうさ、

かまくら、ちのろ、
(鎌倉) 御さる畑、
(お猿島) 八幡宮、
(鶴岡八幡宮)

十八日

一、とち加
(戸塚)

キツン十六文、

十九日

一、延上参り
(芝)

キツン三十二文、

ち右衛門殿

武蔵

又七

惣右衛門殿子共、惣七

吉兵衛殿

えひしや久右衛門殿

かちさくに市原ごふり馬之村、
(上総国) 常心と申ほふ様、
(坊主) オワんも老せん塗、
(岩前)

十六文申成、

八月朔日

江戸ちな川より入、
(品川)

同

一、村松町

二日、三日、三晩〇〇〇ほうさ、

四日、同町、

手前より八十六文たし、ほらかいたし、四百三致し被下、
多ひやへ左衛門様

白米老升、たはこ被下、せん中寺ニ中喰被下、
錢十六文、此寺ニ岡女

神様有、

四日

一、そうか村
(草加)

キツン三十二文、

五日

一、栗橋

キツン二十文、

此村ニ御ばんそ有、船わたり有、

六日

一、大山
(赤松)

〇ほうさ、

七日

一、打ノ宮
(千部宮)

たゝみや新六様

多ひやへ左衛門様

とより

新五衛門殿

惣やと惣右衛門殿

ツけキや五郎兵衛様

中御寺

△キツンほうさ、

八日

一、大沢

勘左衛門殿

キツン十六文、

九日

日光参、神石町、小ちなや藤吉あん内、四十八文山やく、三十二文あ
ん内銭、

八月九日

一、今市

久左衛門殿

米六十八文、キツン二十四文、

於前持太郎ふしとう行、此村ニなし野ニ原有、

十日

一、太田わら(大田原)

下ちよ藤五郎

米六十文、キツン二十四文、

此村船わたり有、

十一日

一、白坂

惣左衛門殿

米五十一文、キツン二十四文、

十二日

一、白川(白河)

えん妙寺

○ほうさ、

あさ二付、とうりよ、

十三日

一、こうり山(郡山)

○ほうさ、

十四日

一、二本松

大原山本久寺

○ほうさ、

此ところニまちり有(有)

十五日

一、福島

本法寺

○ほうさ、

八月十六日

一、かい田(貝田)

へ十郎

キツン二十四文、

十七日

一、月ぬき(月木)

桜や喜右衛門様

○ほうさ、

十八日

一、代入上加

光止寺(光寺)

○ほうさ、

十九日ハしよかま参、(塩)

八月十九日

一、松嶋

田町傳次殿

キツン十八文、

廿日

うしろ村藤四郎殿

一、屋元^(天志)

しんちんさ^(信心者)○ほうさ、

竹ちえもらえ、

廿一日

一、石野まき

○ほうさ、

廿二日、船付上町成、

一、森村

それち、○ほうさ、

廿三日

六町ノ目⁽²⁸⁾

ひる、もちふるまへ、

廿三日

一、さのま^(左船)

○ほうさ、

廿四日

一、柳ノ目

それち、○ほうさ、

廿五日

一、同寺ニとうりよ、

廿六日、此ニべんけころも川有、

一、一ノせき

○ほうさ、

松沢清四郎様

新田町市内様⁽²⁷⁾

止きよ寺^(上行寺)

重吉殿

心止寺^(心性寺)

せき龍山妙久寺^(石龍山妙教寺)

長庄いん^(長昌院)

此寺ニやき米被下、

廿七日

一、三ツ沢^(水沢)

キツん十八文、

此村なんぶさか江有、此村御ばんそ有、⁽²⁹⁾

十八日^(マコ)

一、花まき入市町^(花巻二日町)

キツん十八文、

廿九日、舟橋有、⁽³⁰⁾

一、森岡川原町

○ほうさ、

九月朔日

一、こんや町

○ほうさ、

二日、此五十丁みち五り、野村有、

一、傳藤^(田邊)

キツん十一文、

より之な^(三れより)し切と申坂有、^(折壁番所)をりかべばんそ、⁽³²⁾十文かけ、

三日

一、山び内^(さんび内)

キツん二十文、

此あさゆせ申湯ニツく、^(花巻)花和出し、^(鹿角)かちのニ此村はねはしあり、^(焼ね橋)こふ

り、^(毛内)けま内、^(藤ヶカ)此ところ、⁽³³⁾ま不け寺あり、⁽³⁴⁾けま内うしろ町ニ山元九郎左

藤兵衛

かとや庄次郎殿

佐藤万吉様

市のや庄右衛門様

彦助殿

万十郎殿

衛門様と申しんちんさ有、此村やぶ^(夜分)ん、

四日

一、小坂ノ村ノ

○ほうさ、

御あん^(安堵)と二成申候、

五日ハなんふ山こえ、^(津軽)ちかる江こえ、^(碓ヶ関)碓せき入半三十文、

九月五日

一、碓ヶせき

頼入、半錢わたし、

六日、とうりよ、

一、川え村^(川合村)

七日、あさ参、

弥左衛門様

新右衛門殿

長四郎殿

(完)

註

- (1) 「ほうさ」の原文での文字は、「ほ」は「本」の仮名、「さ」は「者」の変体仮名であるが、字形は仮名の「さ」である。
「報謝」は僧や巡礼に物を与えろと言う意味。報謝を受けて宿泊した際、報謝の上に付された○△は、その程度を示すようだ。
(2) 「崎」と記すべき箇所は「弘前」と同様に「前」と記している。
(3) 「とうりよ」は前の宿泊地から次の宿泊地まで、途中では宿に泊らずに進んだことを意味しているようだ。
(4) この印を「通り」の意味で使っているようだ。以下同。
(5) 現在の国道七号線、新潟県山北町府屋の辺りだが、今は中村の地名は

ない。「奥の細道」で芭蕉たちも泊まっている。

- (6) 長野の久米路「犀川峡」に、曲尺形に架かる橋で、菅江真澄が天明四年（一七八四）この辺りを旅した記録「くめじの橋」でスケッチを書いている。

(7) 筆者の父親、安永九年（一七八〇）にこの旅の前年に没。

- (8) 「おう野」は徳川家康の側室、お万の方が慶長十四年（一六〇九）日遠上人のために建てた「大野山本遠寺」のこと。

(9) 「おまん様」というのは徳川家康の側室「お万の方」。水戸光圀は孫にあたる。熱心な日蓮宗信者で承応二年（一六五三）七十七歳で没。

- (10) 道順から推して、七世紀後半創建とされる臨済宗の名刹「清見寺」の勘違いであろう。

(11) 「ざ江」は地名かどうか不明。津軽弁の「在郷」だろうか、四キロ余上った理由と共に不明。

- (12) 日蓮の父親は貫名重忠ともいわれ、重忠が安房国に配流となった時に日蓮が生まれたともいわれる。この地の「貫名山妙日寺」に日蓮の父母の墓があるという。

(13) 「入うみ」は浜名湖のこと。明応七年（一四九八）の地震により湖口は遠州灘につながり、舞坂宿と新居宿の間の「今切渡」を舟で渡るようになった。

- (14) 吉田藩の新居関所（今切関所）は箱根の関所と共に監視が極めて厳しかった。原文「かれち」の意味は解らず。

(15) 豊川に架かる吉田大橋。東海道四大橋（六郷大橋、矢作大橋、瀬田の唐橋、吉田大橋）ともいわれた大橋の一つ。

- (16) 矢作川に架かる東海道随一の太橋で二〇八間あったともいわれる。

(17) 「熱田神宮」は名古屋城下の門前町「宮宿」にある。また、「宮宿」は東海道唯一の海上路「七里の渡し」で桑名に向かう船待ち宿でもあり、

北上して墨俣、大垣を経て垂井で中山道に合流する美濃路の分岐点でもある。

- (18) 起(おこし) (現・尾西市)を過ぎると木曾川の渡し、墨俣の手前には長良川の渡し、大垣の手前には揖斐川の渡しがあった。濃尾平野を流れるこれらの川は「木曾三川」とも称された。

- (19) 鳥辺山は東山の西腹辺りの一帯で、平安時代からの葬送の地。「日親様寺」というのは日親上人の廟所でもある、鳥辺山にある「本寿寺」のことであろう。

- (20) 大井川を越えるには、先ず鳥田側又は金谷側に設けられた川会所で定められた料金を払い、その割符を川越人足に渡し、肩車や蓮台で渡してもらった。

- (21) 大井川の八キロほど上流の神尾地区にある村。

- (22) 「土の牢」は日蓮の弟子、日朗が押し込められたという伝承のある光則寺裏山の土牢であろう。

- (23) 「お猿島」は名越切通しの近くの「法性寺」、日蓮が松葉ヶ谷の草庵を焼き討ちされた際、三匹の猿が現れ、この山の岩窟に案内して救ったという、日蓮焼き討ち避難の伝説のある場所。

- (24) 日蓮死去の地。現在、この地には日蓮宗大本山「池上本門寺」が建つ。

- (25) 現在も一〇月初めに行われる三五〇年の歴史を持つ二本松神社の提灯祭。

- (26) 筆者は「音」を当て字で表記する場合が多いが、この寺名の場合も「ショウ」の音を「正」と当て字するつもりが、誤って「止」と表記したものである。

- (27) 石巻市千石町の辺り。芭蕉も「奥の細道」で新田町に泊っている。

- (28) 現在の中田町宝江森六町目辺り。

- (29) 水沢は仙台藩と盛岡藩の境で、仙台藩は相去に、盛岡藩は鬼柳に夫々

関所を設け「二所の関」といわれた。

- (30) 北上川に舟を繋いで作った「新山舟橋」で、奥州街道はこの橋を通り盛岡に入った。最初は、天和二年(一六八二)に架けられ明治六年まで船橋が使われた。

- (31) 盛岡から弘前へ通る津軽街道(国道二八二号)は、往時は盛岡から三〇キロほど先の田頭から、その先一〇キロほどの七時雨山に向かい、街道一の難所、七時雨山の中腹「車之走峠」を越えて、更に一〇キロほど先の荒屋に至ったという。現在はこの峠道は無く、田頭から安比高原を経て荒屋に至っている。

- (32) 盛岡から七〇キロほどの折壁は盛岡藩と秋田藩との国境の近くで、田山関所の折壁番所があった。

- (33) 湯瀬を過ぎ米代川を渡ると間もなく「大日靈貴神社(鹿角大日堂)」がある。この大日堂にはダンブリに導かれて酒が湧く泉を見つけた若者がその酒を売って長者になり、その娘が後に帝の中宮となり鹿角・小豆沢にこの堂を建てたという伝説がある。菅江真澄が天明五年(一七八五)にこの辺りを旅した際の記録、「けふのせば布」にもこの話がある。

「ま不け(儲け)寺」とはこの寺のことであろうか。

- (34) 小坂から四キロほどの濁川に盛岡藩の境目番所があり、更に六キロほど先の清水峠(現在の坂梨峠)を越えると弘前藩領となる。

- (35) 「川江村」は弘前市堀越・川合に比定される。

(なりた・こうじ 弘前大学国史研究会会員)

A dark, rectangular stone rubbing with the characters '道名' (Dōmei) in a stylized, ancient script. The rubbing is set against a light background.

[illegible]

八月十日
松崎
又十六日
店元
信口
作
市
石
二
六